

レヴィ＝ストロース

Claude Lévi-Strauss (1908-)

『親族の基本構造』*1949年刊

構造人類学の創始者C. レヴィ＝ストロースの、前期を代表する記念碑的著作。親族研究の新しい地平を切りひらくと同時に、構造主義をひとつの方法として確立した。

本書は、社会人類学の専門的な理論書（博士論文）である。その意義を理解するには、内容を正確におさえる必要がある。

目次は左右対称な構成をとっており、全29章。序説と結論に2章ずつを割り、残りは第1部「限定交換」、第2部「一般交換」に分かれる。前者は第1篇「交換の基礎」、第2篇「オーストラリア」。後者は第1篇「一般交換の単純な図式」、第2篇「漢民族のシステム」、第3篇「インド」に分かれる。

このうち理論的に重要なのは、序説ならびに第1部第1篇（第1章～第10章）である。この部分には、当時の人類学の到達点と、残る課題が要約されている。マリノフスキーにはじまる機能主義人類学は、アフリカをはじめ各地の実地調査で成果をあげ、親族研究の標準的な手法を確立していた。それは、父系/母系の出自（descent）原理、居住制度（locality）、婚姻のタイプなどを調査して、親族組織の詳細な見取図をつくりあげ、それとその他の社会活動（農耕・狩猟や交換などの経済活動、祭祀、呪術、儀式など）との有機的な連関（＝機能）を明らかにするという手法である。こうして多くのことが明らかになったが、同時に、婚姻規則や近親相姦禁忌（incest taboo）をめぐる謎が浮かびあがってきた、とレヴィ＝ストロースは指摘する。

近親相姦禁忌をめぐる謎とはなにか。まずそれは、どんな社会にも必ず見出される。どんな社会も、ある範囲の親族メンバーを性交や婚姻の対象から除いている。つぎに、そのように近親相姦（incest）として除かれるメンバーの範囲は、社会ごとに実にまちまちで

あり、ある社会で禁忌される続柄が、ほかの社会ではむしろ好ましい結婚相手であったりする。それはなぜなのか？

しばしば近親相姦は、生物学的によくない影響を子孫に及ぼすので禁止されている、と信じられてきた。しかし、それでは説明できない事例が多い。また、生物学的な知識を現地の人々もっている、という証拠もない。

近親相姦の禁忌は、それ以外の原因から説明されるものではなく、それ自身が社会の根底であるような基本的事実だ、とレヴィ＝ストロースは考える。彼は、近親相姦の禁忌を“自然と社会の境界”だとする。言葉を喋らない人間が考えられないように、近親相姦を禁忌しない人間は考えられない。交換（コミュニケーション）せよ、交換せよ。それは、社会が成り立つための根本原理なのである。あらゆる民族誌データをこの原理によって統一的に説明できる、とレヴィ＝ストロースは考える。

『親族の基本構造』の成果は、一連の婚姻のタイプ（局所の親族関係）が、どのような交換システム（社会全域の婚姻交換のメカニズム）に対応するかを論証したことである。

特定の続柄の人間を、ふさわしい結婚相手として指定したり選好したりする社会が少なくない。特定の続柄とは同年代の親戚、すなわちイトコ（cousin）である。イトコは、ある人物（便宜上男性とする）からみて、父のキョウダイ（sibling）の子である場合は、父方（patrilateral）のイトコ、母のキョウダイの子である場合は、母方（matrilateral）のイトコという。また、同性のキョウダイ（兄と弟、または姉と妹）の子同士である場合は平行（parallel）イトコ、異性のキョウダイ（姉と弟、または兄と妹）の子同士である場合は交叉（cross）イトコという。たとえば、母の兄弟の娘（MBD）は母方の交叉イトコ、父の兄弟の娘（FBD）は父方の平行イトコである。さらに、あるイトコがたまたま父方のイトコでありかつ母方のイトコで

もある場合には、両方（bilateral）イトコという。

さて、民族誌データを整理して、レヴィ＝ストロースはつぎのような事実に気づいた。第1に、平行イトコは一般に選好されない。第2に、あるタイプの社会は、両方交叉イトコを選好する。またあるタイプの社会は、母方交叉イトコを選好する。またあるタイプの社会は、父方交叉イトコを忌避する（父方/母方の非対称）。こうした現象は、同じ親等の片方を選好するのにもう片方を忌避するので、非合理だと考えられてきた。これに対しレヴィ＝ストロースは、親族現象の全体をコミュニケーション（婚姻交換）のシステムと考えれば、すべてが合理的に説明できると考えた。

経済活動や階級分化が発達していない「単純社会」は、親族関係が社会の骨格になっている。レヴィ＝ストロースによればそれは、親族が女性の交換を主題にしているからである。女性を確実かつ安定的に交換するには、限定交換（女性を与えた集団からお返しに女性を受け取る、すなわち、 $A \leftrightarrow B$ ）か、一般交換（女性を与えた集団とは別の集団から女性を受け取る、すなわち、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow \dots \rightarrow A$ ）か、いずれかしかない。前者、すなわち限定交換システムでは、結婚のタイプは典型的には姉妹交換婚（双方の男性が姉妹を互いの妻とする）となり、これを数世代にわたって繰り返せば、両方交叉イトコ婚となる。後者、すなわち一般交換システムでは、結婚のタイプは、典型的には母方交叉イトコ婚となり、平行イトコや父方交叉イトコは結婚の対象とならない。社会全域にわたる交換システム（限定交換/一般交換）と、局所の性質である婚姻のタイプ（両方交叉イトコ婚/母方交叉イトコ婚）とが対応する現象であるというのが、本書の中心的主張である。

以上の結果を検証できるのが、オーストラリアの婚姻クラス・システムである。単純な半族システムや、アランダ、カリエラ、ムルンギン型など複雑な婚姻クラスをもつシステ

ムを分析すると、上述のような交換システムと婚姻のタイプとの対応が裏づけられる。

いっぽう各地の民族誌データは不完全で、ある社会では婚姻規則のみが、別な社会では婚姻タイプのみが知られている。けれどもそれらのデータを、いまのべた対応を想定して補うと、一般交換システムが実は広範囲に分布している様子が判明する。それが、満州から中国、ビルマにかけての帯である。最後にインドについても、データの整理と仮説の検証を試みる。

こうして本書は、最後にこう結論する。単純社会の婚姻交換のメカニズム（すなわち、親族の基本構造）は、限定交換/一般交換の2つに限られる。それぞれ、両方交叉イトコ婚、母方交叉イトコ婚に対応する。いっぽう父方交叉イトコ婚は、交換システムを生み出さない。それは現金取引（与えた女性をすぐ取り返す）、すなわち、交換相手への不信を意味するからである。

『親族の基本構造』は、英米系の機能主義人類学と異なる方法にもとづく、社会人類学の可能性を示した。レヴィ＝ストロースによれば、機能主義人類学が根本的であるとみなした系譜原理（父系/母系の違い）は、親族現象にとって二次的である。根本的なのは、社会を交換（コミュニケーション）のシステムととらえることである。この着眼は、親族以外の領域、たとえば神話研究に適用され、成功をおさめている。

翻訳は本書の第2版にもとづく。初版に対して寄せられた批判を考慮して、一部に修正があるが、テキストに大きな異同はない。

橋爪大三郎

〔書誌データ〕 Claude Lévi-Strauss, *Les structures élémentaires de la parenté*, P.U.F., 1949; rev. ed., Mouton, 1967 (『親族の基本構造』上・下、馬淵東一監訳、番町書房、1977-78)。

上野千鶴子 (1948-)

『構造主義の冒険』*1985年刊

レヴィ＝ストロースの構造主義を中心とした理論社会学の著作。構成は「1. 構造主義入門, 2. カオス・コスモス・ノモス——聖俗理論の展開, 3. 異人・まれびと・外来王または『野生の権力理論』, 4. 異常の通文化的分析, 5. パーガー——われらがシャーマン, 6. 構造主義の認識論, 7. レヴィ＝ストロースの社会フロイディズム批判, 8. 発生的構造主義へ向けて」。日本語で書かれた構造主義の入門書としては橋爪大三郎の『はじめての構造主義』(講談社)とともに有益であろう。レヴィ＝ストロース構造主義の批判的再構成を経て、さらに宗教社会学の理論的展開、人類学的文化理論、さらに応用問題としての首長制と国家の発生に関わる民俗学的権力理論を論じる。理論的にはリュシアン・ゴールドマンおよびジャン・ピアジェの発生的構造主義の視点をレヴィ＝ストロースの先験的構造論に統合し、歴史的変動を扱えないとする構造主義批判に答えようとする。さらに日本民俗学のハレ・ケ・ケガレの概念や、柳田国男の「異人」、折口信夫の「まれびと」概念を構造主義的なパラダイムで読みとこうとする試みに先鞭をつけた。「説明」と「理解」とが社会に対してどのような「了解可能性 intelligibility」を提供するかを論じて、知識人論にも及ぶ。社会学、人類学、宗教学、民俗学などの境界領域にまたがる文化理論の構築である。日本をフィールドとした民俗学、神話学への構造主義の応用は、その後日本神話の構造主義的分析である「記紀の神話論理学」(桜井好朗編『神と仏』春秋社)へと発展した。

著者要約

【書誌データ】 上野千鶴子『構造主義の冒険』勁草書房、1985。

ウォルフレン

Karel van Wolferen (1941-)

『日本／権力構造の謎』上・下 *1989年刊

オランダ生まれの在日ジャーナリスト、カレル・ヴァン・ウォルフレンが、政治家や官界、財界、言論界の人々多数に面接し、調査を重ねて著した日本研究書。膨大なデータを駆使して、日本的な権力のありかを描き出している。発売と同時に世界的なベストセラーとなり、日本見直し論者(リビジョニスト)のバイブルとしてもはやされた。

本書の中心となる概念は、〈システム〉である。〈システム〉は、欧米のような民主主義・法治国家を支配する、明確な原則の反対物。表だった組織や制度の背後ではたらく、明確に規定できない、日本社会の暗黙の運動メカニズムのことである。このメカニズムは学閥や人脈、慣例、既得権、利権や行政指導や系列や談合を通じて作動するから、それを描き出すには、具体的な組織や人名をあげ、実例を通じて論証していく必要があった。本書を通じて、日本は、欧米と異なるルールによって経済を運営し、外国の参入を拒んでいるアンフェアで閉鎖的な社会だという印象が広まった。90年代に相ついで表面化した、証券銀行不祥事、中央官庁の不祥事は、本書の指摘を裏づけたと言える。

本書がメスを入れたのは、自民党、官庁、財界、マスコミ、警察などの実態である。著者は、戦後日本のスタート時点で、旧内務省や警察官僚が社会の中核に深く食いこんだと指摘する。政財官やマスメディアにネットワークを広げる〈システム〉の内実をあばく本書は、とくに海外の日本研究者にとって、必読の入門書となっている。

橋爪大三郎

【書誌データ】 Karel van Wolferen, *The Enigma of Japanese Power: People and Politics in a Stateless Nation*, Macmillan, 1989 (『日本／権力構造の謎』上・下、篠原勝訳、早川書房、1990; 早川文庫、1994)。

橋爪大三郎 (1948-)

『言語ゲームと社会理論』*1985年刊

20世紀の哲学者L. ヴィトゲンシュタインの、言語ゲーム(language game)の思想を要約し、それを基礎に社会理論を組み立てた論考。続編の『仏教の言説戦略』(1986)はその構想をさらに発展させている。

全体は3章からなる。第1章は『論理哲学論考』『哲学探究』ほかを参照しつつ、初期／後期のヴィトゲンシュタインを対照し、言語ゲームがどのように画期的なアイデアが紹介される。すなわち言語ゲームは、ルールに従った人間のあらゆるふるまいのことであり、社会はそれによって成立していると考えられる。第2章は、英国の法理学者H. L. A. ハートの『法の概念』(1961)を、言語ゲームのモデルにより再構成する。ハートは、法を「一次ルールと二次ルールの結合」と定義したが、これはそれに対応する言語ゲームの結合と解釈できる。第3章は、N. ルーマンの『法社会学』を批判的に検討する。ルーマンは規範の予期から法規範が導かれると考えたが、論理に飛躍があり、予期によって法を基礎づけることはできない。

本書の要点は、言語ゲームに関する次のような主張にある。(1)言語ゲームとルールは1対1に対応する。(2)ルールの記述は、もとの言語ゲームと異なる言語ゲーム(論理学)である。(3)ルールへの言及による結合のほかにも、さまざまなかたちで言語ゲームは複合する可能性がある。(4)社会は、言語ゲームの複合の総体として記述できる。これに対して、ルールが一義的に存在するか、言語ゲームと対応するかという疑問・批判が寄せられ、論争が継続している。

著者要約

【書誌データ】 橋爪大三郎『言語ゲームと社会理論—ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』勁草書房、1985。

ハート

Herbert Lionel Adolphus Hart (1907-)

『法の概念』*1961年刊

現代英米法をリードするイギリスの法理学者ハートの代表作。法理学(jurisprudence)は法律の専門家を対象に、法とは何かを哲学的・道徳的基礎にもとづいて教育する、実際の学問である。

本書は全部で10章からなるが、内容からみて3つの部分に大別される。第1に、法が外的強制により生まれるとした法学者J. オースティンの学説を批判する部分。第2に、法を「一次ルールと二次ルールの結合」であると定式化する部分。第3に、法と道徳とが重なりながらどう異なるかを解明する部分。以上のように本書は、慣習法に立脚する英米法の立場から、法規範のあり方についてのもっとも原理的で一貫した考察を展開している。

ハートによれば、人びとは自発的にルールに従う能力をそなえている。そうしたルールのうち、責務を課すルールを一次ルールとして発展した二次ルール(承認のルール、裁定のルール、変更のルール)が、いわゆる法であるという。この定式は難解と考えられてきたが、橋爪の『言語ゲームと社会理論』は、これをヴィトゲンシュタインの言語ゲームのアイデアにもとづいて整合的に解釈した。また、言語哲学者J. L. オースティンのハートに対する影響を重視する見方もある。

ハートは、権威や正統性とは何か、法はなにゆえに従われるのか、悪法も法であるか、道徳は法を基礎づけるか、といった基本的な問題に解答を与えた。また本書は、ドゥワオーキン、カドーゾら多くの法学者、哲学者によって批判的な検討の対象となり、20世紀法学の発展のひとつの源泉となった。橋爪大三郎

【書誌データ】 H. L. A. Hart, *The Concept of Law*, Clarendon Press, 1961 (『法の概念』矢崎光圀監訳、みすず書房、1976)。

レヴィ＝ストロース

Claude Lévi-Strauss (1908-)

『構造人類学』*1958年刊

フランスの構造人類学者レヴィ＝ストロースの、初めての論文集。本書、ならびに随筆『悲しき熱帯』(1958)により、著者は新思潮、構造主義 (structuralisme) の旗手として広く内外に知られることになった。

本書は、3つの研究分野にまたがる。第1は、言語学と親族研究の内在的な連関を扱う論文。第2は、具体的な民族誌データから社会組織を扱う論文。第3は、呪術・宗教・芸術といった表象の形態を扱う論文。これらにより、前期の『親族の基本構造』(1949)から後期の神話研究への展開を見渡せる。

本書は、構造人類学の方法を提示した書物として大きな意義をもつ。著者は、さまざまな種族の社会構造や文化が類似していることに興味をもった。この事実は従来、文化の伝播や発展段階から説明されてきた。著者はまず、そうした伝播主義、古典人類学、マルクス主義が無効だとする。むしろそれは、人間精神の隠された〈構造〉の発現であって、そうした〈構造〉は、親族の領域、社会構造や神話の領域に普遍的に見出されるという。こうした〈構造〉は、言語学（とくにR. ヤコブソンの音韻論）が開発した方法、すなわち一連の二項対立を取り出し、その代数的関係をつきとめる作業を通じて浮き彫りになっていくのである。

この議論が正しければ、マルクス主義の歴史観はまっこうから否定される。そこで、本書をきっかけに、左翼の立場から実存主義を構築していたサルトルと論争になった。その論争を通じて、構造主義の系譜は70年代以降の思想界の主役となり、来るべき社会主義崩壊の前奏となったのである。

橋爪大三郎

【書誌データ】 Claude Lévi-Strauss, *Anthropologie structurale*, Plon, 1958 (『構造人類学』 荒川幾男他訳、みすず書房、1972)。

レヴィ＝ストロース

Claude Lévi-Strauss (1908-)

『今日のトーテミズム』*1962年刊

構造人類学を確立したレヴィ＝ストロースは、本書の執筆を境に、前期の親族研究から後期の神話研究へと移行していった。本書と『野生の思考』(1962)とは、ライフワークである『神話論』全4巻の序論にあたる。

「今日の」とは、かつてオーストラリアのトーテミズムを考察したE. デュルケームの『宗教生活の原初形態』(1912)を意識したもの。本書はまず、フレーザー以来の古典人類学を再吟味し、それがなぜトーテミズムという誤った観念を生み出したのかを考える。つぎに、自らの親族研究の成果を踏まえ、オーストラリア原住民にみられる婚姻クラス・システムが「未開」などころか、無意識のうちに人類の普遍的なロジック（現代数学の代数的構造）をそなえていることを指摘する。さらに、トーテムが世界を考えるのに都合のよい (good to think) 道具であって、近代科学に匹敵するもうひとつの分類体系を形成していることを示唆する。

本書は、野生を生きる人々の精神世界（コスモロジー）を対象にする。著者によれば、現代西欧社会のうみだした人類学（のトーテミズムの観念）は、野生の人々の精神世界と同等なものにすぎない。とすれば、トーテミズムは野生のコスモロジーを説明する、特権的な「理論」ではありえない。野生のコスモロジーはただ、親族研究の分野で有効であることが示された方法——二項対立などを駆使する構造言語学の方法によって、その構造をあぶり出されるしかないものなのだ。こうして、レヴィ＝ストロースの神話学の基本的アイデアが成立した。

橋爪大三郎

【書誌データ】 Claude Lévi-Strauss, *Le totémisme aujourd'hui*, Presses Universitaires de France, 1962 (『今日のトーテミズム』 仲沢紀雄訳、みすず書房、1970)。